

異界の魔術士
2

Main Characters
登場人物
紹介

重雄

朔耶の兄。萌えオタで妹好き。21歳。

孝文

朔耶の弟。機械好きの理屈屋。17歳。

???

ガルブレック

真面目な帝国の密偵部隊隊長。36歳。

ネット

帝国密偵部隊の精鋭隊員。「春売りのヴィヴィアン」の名でも活躍。28歳。

レティレスティア

『精霊の国』と名高いフレグンス王国の王女。優れた精霊術士。16歳。

都築朔耶

突然異世界に召喚されてしまった女子高生。機械弄りと武道と人をのせる演技が得意な18歳。

目次

異界の魔術士 2

番外編 猛進お嬢様と村長の馬鹿息子

外伝 氷の騎士 レイス・チル・アクレイアの足跡

265

209

7

異界の魔術士
2

朔耶はこぢんまりとした隠し部屋からほんと真つ暗に近い会議室に出て、隠し部屋の扉を閉じた。そして精霊に頼んで鍵を掛けてもらう。

扉に付けられた五つの鍵がガガガガガッと音を鳴らしながら同時に掛かる様子は、傍から見るとまるでポルターガイスト現象のようだ。

すっかり使い慣れた精霊術の意識の糸を放射状に伸ばし、近くに人がいないかを確かめる。

「よし、誰もいない」

静かにそう呟いた朔耶は、湯浴み場を探すべく無人の会議室を後にした。

朔耶が出て行つた後、一度起き上がってランプの灯を落としたバルティアは、再びシーツに包まつてベッドに横たわる。

（鍵が一斉に掛かる様さまはなかなか壯觀さうくわんだつたな）

いつもは冷たいはずのベッドの中、ほんのり温かい朔耶の残り香に包まれながら、バルティアは久しぶりに心安らぐ眠りにつくのだった。

（ほんと、なんなかしらね……）

ふつと溜め息一つ。朔耶は、先程隠し部屋にてシーツの奪い合いを繰り広げた銀髪の優男、第十四代グラントウルモス帝国皇帝の事を考える。

自分の城にいながら常に命を狙われているという若き皇帝バルティアは、朔耶が当初思い描いていたような『独裁者』ではなく、何とも掴みどころの無い『変な奴』だった。精霊によって突然この世界に召喚されて以来、色々な人と出会つてきたが、あのタイプは初めてだ。

朔耶はバルティアに渡された許可書を赤いジヤケットコートのポケットの中で弄もてあそぶ。

帝都城内の施設を自由に使つて良いという皇帝の許可書。いきなり「余の妻になれ」などと言われた時はさすがに驚いたが、コレで身の安全が図れるなら、返事を『保留』くらいにはしておいても良い。

そうすれば、とりあえず『フレグンス王国から攫さらわれて來た捕虜』という立場からは解放され、追われる事もなくなる。ついでに謁見の間でやらかした大立ち回りもチャラになれば嬉しいな」と期待しつつ、大勢の人の気配がする下の階へと続く階段を踏み出した。

隠し部屋でひと眠りする前までうねるようにざわめいていた自分の中の精霊は、今のところ落ち着いている様子だ。

（後でまたレティに交感で連絡しよう）

フレグンスの天然清楚な第一王女レティレスティアには、帝国こごからでも意識の糸を繋ぐ『交感』での会話が可能なので、今後の事なども話し合うつもりだ。

「そういえば、お腹も空いたなあ」
下腹部をさすさすしながら人の行き交う廊下に下り立つた朔耶は、とりあえず食事が出来る所を探そうと歩き出した。

第一章 帝都クラティシカ

帝都城の下層階である一、二階は、城下街がそのまま収まつたような造りになつてるので、とにかく広い。

朔耶が今いるこの帝都城二階には、士官クラスの者が寝泊まりする宿舎やその家族達が住む居住区などがあり、特に階の中央区画にはたくさんの部屋が並ぶ。似たような外観の続くその様はまるで迷路のようだ。

一階には一般兵達の兵舎が、城を囲む防壁内の壁沿いにぐるりと並ぶ。そこには彼等の家族が暮らす居住区や、一般兵食堂などの施設もあり、一部の兵舎には乗用犬などの厩舎も併設されていた。
夜の帳も下りたばかりの時間帯。下層階は一、二階ともにまだ人通りも多く、城で働く一般民や仕事帰りの買い物客などが大きな通りを行き交つている。

山上にある城だけに少々気温が低く、皆やや厚手の服を着ていた。その中でも朔耶の赤いジャケットは、ちょっと珍しい色とデザインのコートという事で済みそうだが、短いスカートやこの世界ではあまり見ないという黒髪はさすがに目立つ。
帝都城一階の中央通り。少し疎らになり始めた人込みの中をキヨロキヨロしながら歩いていた——ふつちやけ迷子中の朔耶は、脇道と繋がる十字路でヴィヴィアンとばつたり出くわした。

「あ」

「ちょっと……！」

『春売りのヴィヴィアン』こと帝国密偵部隊員のアネット。朔耶をフレグンス王国からここグラントルモス帝国まで攫つて来た実行犯の一人である。

謁見の間で一騒動起こした朔耶の搜索に加わっていた彼女は、想定する逃走範囲を目指して近道の途中、大通りに出た。そして「こんな人通りの多い場所をうろついているワケ無いわよねー」と思つた瞬間、捜索対象が目の前に現れたので、思わず「なんでココにいるのよっ」と突つ込んでいた。

それに対し「攫われて来たからよ！」とツツコミ返す朔耶。

「ご、ごもつとも……」

「まあそれはともかく、いいところで会つたね」

ちょうど良いので道案内を頼む事にした朔耶は、さつそくポケットから出した許可書をじやじゃーんとアネットに見せるのだった。

「へえ、陛下に会つてたんだ？」

「なんかイメージ違つてビックリしたよ……いきなり妻になれとか言うしさあ」

「あはは。あの後、謁見の間でも大変だつたのよー？」

帝国密偵部隊の精銳である事を示す部隊服を纏つた麗しきエリート隊員と、珍しい風貌の黒髪の少女が、お喋りをしながら帝都城の廊下を並び歩く。すれ違う一般民や謁見の間での騒動を知らな

い兵士達は、その一風変わつた組み合わせに皆振り返つていた。

そんな中、この時間の湯浴み場は混んでいるので食事でも済ませてからにした方が良いとアネットに勧められ、朔耶は彼女と連れ立つて三階の士官食堂に向かつていた。

ちなみに、帝都城の湯浴み場は地下に設けられた共同施設である。実のところ湯浴み場と言つてもサウナに近い。

それらは一般民用と軍関係者用に分かれており、軍関係者用の中でも下つ端兵達は大浴場を十数人単位で利用し、士官クラスの者達は個室を使う。

士官食堂までの道中、度々小隊を組んだ騎士団や魔術団と遭遇し、囲まれてはその都度許可書を見せて解散させるというやり取りが繰り返された。

「あーもう！ もしかしてこの国の軍隊つて情報伝達網とかちゃんと整つてないの？」

「いやーあははは、何しろ突然の事だつたからねえー。しつかし……なんか手馴れてるというか、やたら貰禄あるわねえサクヤちゃん——あ、后妃様つて呼んだ方がいいかしら？」

「やめてよ、あたしあの人と結婚する気なんか無いんだから……」

「あら、どうして？ 若くて聰明で、容姿端麗、グラントルモス帝国の頂点に立つ皇帝陛下よ？」

「お買いでじやない。ちょっと何考えてるか分かんないところもあるけど」

そんなアネットの問い合わせに、朔耶は「確かに何考えてるのか分からぬー」とはぐらかした。そんな会話をしながら辿り着いた士官食堂は、多くの利用者で賑わっていた。中には家族連れの姿も見られ、一階にある雑然とした酒場っぽい一般兵食堂と違い、小奇麗で少しばかり上品などこ

ろが元いた世界のファミリーレストランを思わせる。そのため朔耶はこの食堂がとても気に入った。この日から士官食堂の一角では時折、トレイを並べてお喋りしながら食事する密偵部隊の女性隊員と異国の少女の姿が見られるようになるのだった。

食後に湯浴み場まで案内したついでに自分も汗を流したアネットは、朔耶と別れ、密偵部隊の待機室までやつて来た。朔耶は「適当な隠し部屋を見つけて休む」と言つて人込みの中に消えたが、士官食堂の近くに潜伏するつもりである事は本人に確認している。

「アネット隊員、君に話がある」

部屋に入るなり密偵部隊隊長ガルブレックの執務室に呼び出された。

執務室に入ると、何故かエリスリング諜報官が疲れた様子で俯いてソファーに座り込んでいる。

ガルブレック隊長も似たような空気を纏つており、どうやら二人とも朔耶の事で皇帝の側近達にしこたま叱責——というか罵倒されたらしい。

「随分ご立腹だつたみたいですもんね！」

皇帝陛下を含め、側近や帝国騎士団、魔術団、そして自分達密偵部隊等、謁見の間にいた者全員が、朔耶の精靈術らしき規格外な電撃で気絶させられたのは、今日の昼過ぎの出来事である。

「術封じの枷^{なが}を付けていなかつた理由を散々説明させられたよ」

「私はとばつちりもいいところだぞ……」

朔耶からは電撃を浴びるわ、側近からは罵声を浴びるわ、責任問題で減給まで検討されて疲れた、

と愚痴^{ぐち}る上司一人。

それはご愁傷様^{しゃうきょうようさま}でしたと他人事なアネットだが、「それはさておき」とここに呼ばれた要件について告げられる。

「実は陛下から我々に直接命令が下つてな」

「もしかして、サクヤちゃんの事ですか？」

察しの良い部下に救われたような表情を見せるガルブレック隊長。任務の内容は『サクヤの観察と詳細な情報の入手』だ。趣味や嗜好^{しあう}、価値観。何でも良いので彼女の事を調べて報告せよとの事。

「君が適任だと思う」

「まあ、向こうも話しやすそうにしてましたし……」

任務を受ける事に異論はないが、ガルブレック隊長やエリスリング諜報官からは何だか気が進まないような雰囲気を感じ、アネットは訳を訊ねてみる。

「うむ……正直なところ、陛下があの娘——サクヤ殿を気に掛ける事については、少しな……」

「側近達との不和が心配だ」

「たまにはいいんじやないですか？ 今まで『無氣力帝』なんて陰口を叩かれてた陛下があそこまで執着してゐるんですから」

珍しくやる気見せてるんだから応援してあげましょーよー等とお気楽な事を言うアネットに対し、二人の上司は難しい顔のまま唸^{うな}つていた。

* * *

深夜。

帝都城の深い所。闇と結界に隠された秘密の場所。

深遠に潜む支配者が、集まつた忠実なる臣下達に裁断を下す。

「……まつこと……ゆゆしき……ことよ……」

「申し訳ありませぬ。我々が付いていながら」

「……よい……したがえぬ……人形なぞ……やしなえぬわ……」

カクカクと首を震わせて嗤つた深遠の支配者が、すっと手を払つて指示を出すと、臣下達は畏まつて礼をする。そうして一人、また一人と、結界の外へと消えていった。

* * *

翌日、別の隠し部屋で夜を明かした朔耶が、朝食をとるうと士官食堂にやつて来ると、アネットが席を確保して待つていた。

「おはよー、ヴィヴィアンさん」

「おはよ、サクヤちゃん。つていうか、あたしはいつまで『春売りのヴィヴィアン』なの？」

「あたしの気が済むまで

「報復だつたつ!?!?」

ガーンとショックなど受けて見せる帝国諜報機関密偵部隊所属、精銳隊員アネット・ヴィヤンド、二十八歳独身。そんな冗談めかした話をしながら一人は朝食をとる。

「それで、用件は？ わざわざあたしが来るのを待つてことは何か用事があるんでしょう？」

「聴いわねー」

アネットは朔耶の察しの良さに感心しながら、上からお達しのあつた朔耶の処遇について告げた。
——皇帝陛下バルティアの命令により、朔耶には帝都城内に居住権が与えられ、各種施設の利用及び発明品の設置なども自由に行えるものとする。

「あんまり大掛かりなモノは事前に申告が必要だけどね」

「……それって、こつちの国のためになんか作れって意味よね？」

「うふふ、本当に聴いわねー」

否定しないアネットに、「やつぱりかい」と面倒そうな顔で天井を仰ぎ、朔耶は溜め息を吐く。
恐らくフレグランスに帰すつもりもないのだろう。何せ結婚相手に指名してきたのだ。
「自力で帰るのはさすがに無理だしなあ……」

「生活とか待遇とか陛下に保障されてるんだから、開き直つて帝都城生活を楽しんでみたら？」
結構いい所よく？ と勧めつつ、アネットは任務を遂行すべく朔耶の動向を注意深く観察する。
この異国の少女は、ちまっこい見た目に反して実にバイタリティに溢れ、大胆な行動力を持つ。目

を離すと何をしでかすか分からぬ。

その類稀なる力——精靈術によるものらしいが——が振るわれた謁見の間での騒動については、一応緘口令が敷かれているものの、人の口には戸が立てられないとの言葉通り、既に兵士達の間でも噂になり始めていた。

「あの優男、上手いこと騙くらかして帰れるように誘導しようかしら」

「今サラッとすごいこと言ったわね……」

たらりと汗を一筋垂らしたアネットは、「こりや本当に何をしでかすか分からぬ」と呆れ半分感心少々。そして警戒以上に、何か面白い事をしてくれそうだという期待感を覚えるのだった。

「あ、そういえば、フェルトさん達つてどうなつたの?」

「亡命して来たフレグンス貴族の事? あの人なら帝国貴族に迎え入れられたわよ?」

そういう手はすになつて、少しばかり事情を明かすアネット。もつとも、主君への忠義を重んじる帝国貴族や将兵達からは『祖国を裏切つて帝国にやつて来た者』と見られ、あまり歓迎はされてないようだと付け加える。

「んん? 確か帝国側からあの人声かけて色々工作とか頼んだつて竜籠の中で言つてたよね?」

「んく、まあ、あんまり詳しくは話せないけど、協力してもらつてたつて感じさね」

「それつて、自分達のためにフレグンスを裏切らせといて、いざ身内に迎えたら裏切り者だから軽蔑してるつてこと? 自業自得かもしんないけど、ちょっと酷くない?」

それで忠義が云々とか笑わせるわーと肩をすくめて見せながら、ステイック状の野菜をぱりぱり翻る朔耶。

「あはは……辛辣。けどまあ、そんな感じかもね?」

国家間の陰謀周りなんてそんなモノよ、とその世界の不条理さを語るアネット。そうしている間にも、彼女は朔耶の在り方が少しづつ掘めてきたような気がしていた。

自分を陥れた相手に対し恨みつらみを漏らすでもなく、その者が冷遇されている事を嘲るでもなく、むしろ帝国のために働いた者を冷遇する帝国側に批難の矛先を向けている。

(ある意味、真つすぐなのかもね……)

しかし、真つすぐ過ぎて何か裏があるんじゃないかと不必要に勘織り、その本質を見誤つてもいけない。朔耶に関しては、見たまま在るままの姿を、その言葉のままに受け止めるようにした方が良さそうだとアネットは判断する。

「あ、そうそう。サクヤちゃんには上層階に部屋が与えられるから、先にそっちを案内するわね」「部屋かあ、確かに住む所は必要よね」

食事を終えた朔耶は、とりあえず城内の各種施設を案内してもらう。

今日は土官食堂近くの隠し部屋で寝ていたので、起き出してから迷う事なく食堂に辿り着けた。しかしここはかなりの広さを誇る帝都城、その一部は迷路のようになつてているということもあり、下手などころに入ると確実に迷子になつてしまふ。

そんな事をつらつら考えながらアネットの後について上層階を歩いていた朔耶は、廊下の先にバルティアの姿を見つけた。

側近と何やら話しながら歩いていたバルティアは、朔耶を見つけると話を中断して真っすぐ歩み寄つて來た。アネットが皇帝に対する礼をとりながら一步退く。

朔耶は城での待遇について、「お礼を言うべきかな。いや、そもそも攫われて來てるんだし……」と、内心で葛藤していた。

すたすたと朔耶の真正面までやつて來たバルティアは、朔耶の頬に右手でそつと触れ、そのまま撫なでるように顎を掬い上げると、ごく自然な動作で顔を近づけて來る。

あまりにも予想外の行動にポカンと見上げていた朔耶は、とりあえず拳を握ると、捻り込むように右のフックを叩き込んだ。

「へ、陛下——！」

バルティアの後ろに控えていた側近が叫ぶ。

一方おはようのキスをして殴り倒された皇帝陛下は抗議の声を上げた。

「何故殴る」

「何しようとしてんのよ！ あんたはつ」

思わず距離を取りつつ顔を赤らめながら怒る朔耶。頬を擦りながら起き上がったバルティアは、いぶかしげに小首を傾げながら言う。

「接吻だ。知らないのか？」



「知つとるわ！」

うがーっと吠えている朔耶の額にベタリと手を置いて宥めながら、バルティアは先程から唚然としている側近に声をかけた。

「とりあえず、その件はそのまままで良い」

「は、あ、いえ、畏まりました。では、そのように」

急に仕事の話を振られた側近は慌ててそう答えると、朔耶がバルティアの手を自分の顔面からべいつと引き剥がす様子を困惑の表情で見ながら去つて行つた。

「さて、余は執務室に行くか」

それではな、と背を向けて自分の仕事場へと向かうバルティアに、朔耶は何だか翻弄されているような気分になつた。

「あんにやろーつ、ワケわからん！」

「いやー、なんかすごいもの見ちやつたわ」

朔耶と皇帝のなかなか過激なスキンシップを目の当たりにしたアネットが、苦笑混じりに呟いた。

帝都城の上層階、皇帝の執務室や側近の部屋がある六階の一角。

朔耶はアネットに案内されて、廊下の奥の方にあるやたら豪華な扉の前までやつて來た。ちなみに、一つ下の階には例の騒ぎを起こした謁見の間がある。

「ここがサクヤちゃんの部屋よ」

「部屋つてか最早ホールよね」

自転車が二、三台走り回れそなぐらいいだだつ広い空間。

継ぎ目のない落ち着いた装飾模様の絨毯が敷き詰められ、上品なデザインの椅子とテーブルが並び、その向こうには豪華な天蓋付きのベッドが見える。いかにもお姫様の部屋という雰囲気だった。「もつと普通の小さい部屋とかないの？」

「あら、普通の年頃の娘ならこんな部屋に住めるなんて飛び上がつて喜びそうなのに」

「えーえーどうせあたしはフツーじゃありませんよー」
唇を尖^{とが}らせてそんな事を言いながら朔耶は部屋の真ん中までテクテクと進み、ぐるりと壁、床、天井を見やつてから扉の前まで戻る。

「どうしたの？」

「ううん、なんでも。次の場所に案内お願い」

次は工房を見てみたいと言う朔耶に、アネットは小首を傾げつつも案内を続けるのだった。

帝都城の工房は二種類あり、主にランプや装飾品、その他日用品などの小物を作る工房は城内に、大型の兵器類や馬車など、大きな物を手掛ける工房は、外庭に面した二重防壁の内側に並んでいる。家具類も大型の物は外の工房で作るが、化粧箪笥や椅子、テーブルなどは城内の工房が使われる。朔耶はそういうた城内工房群の中でも、とりわけ高価な物を手掛ける工房にやつて來た。

アネットに「こちらがサクヤ式考案者のお嬢さんよ」と紹介された朔耶は、帝都城の工房群を取

り仕切る工房主でもある壮年の職人さんに挨拶する。

「ほう、サクヤ式考案者の娘か」

「初めましてー」

「で、サクヤ式の考案者はどこに？」

「え？」

ここつ、と自分を指さす朔耶。

「いやいや、お嬢さんがサクヤ式考案者の娘だつてのは分かつたよ。俺が言つてるのはサクヤ式考案者本人の事さ。あなたの親父さんか、お袋さんが来てるんだろ？」

「いや、だから、あたしがそのサクヤ式考案者の朔耶で、娘つて確かに娘だけどあはははははつ」ギヤグのような認識のすれ違いがツボにハマつてしまい、腹を抱えて笑い出す朔耶。それを見たアネットが「こちらはサクヤ式考案者であるお嬢さんよー」と言い直す。

常に新しい情報に触れられる上層階の人達と違い、一般民の工房主や下層階で働く人々にはサクヤ式考案者についてあまり詳しくは伝わっていないかったらしい。

「まさかこんな小娘だつたとは……あ、いや失礼した」

「いえいえ、小娘ですもの」

ほほほーと余裕とも達観とも取れる態度で流す朔耶に、壮年の職人さんは「何か作つてほしい物があればいつでも来て良い」と笑いかけた。

「じゃあ次、行つてみよう」

「分かつたわ。次は——」

そうして工房が並ぶ通りを後にした朔耶は、午前中の間、城内をあらかた彼方此方巡つて過ごした。

士官食堂での昼食時。

アネットと向かい合わせの席で午後の予定を話し合っているうちに、朝の内に粗方の施設を見て回つたので昼からは下層階の通りを歩いてみよう、という事になつた。

「お城の中の街ってどんな感じなんだろう」

来たばかりの時も今日も、施設が集まる場所を中心に歩いていたのでなかなか想像できない。

「ん、ちょっとせこましいくらいで、普通の街の通りとそう変わりはしないわよ？」

城内なので貧民街のようなあからさまにうらぶれた場所は無いが、一応それっぽい治安の死角となる危険な区画もあるので、後で教えてくれるという。

「危険地帯かー……」

「まあ、サクヤちゃんくらいの実力者なら問題ないかもしれないけど」

「それは買いかぶりだつて」

朔耶が「あたしは素人ですよー」と、あまり説得力のない弱者アピールをするも、アネットには

「随分凶暴な素人ね?」などと突つ込まれた。

「く……つ、お兄ちゃん達のあたし凶暴説は却下したのに……つ」

ぐぬぬと唸る朔耶は内心で「異世界に来てまで言われるとはつ」と毒つきながら、スープで煮込

まれて柔らかくなつた肉をワイルドに噛み千切る。モツシャモツシャ。

「あら、ご兄弟がいるの？」

「んぐんぐ——うん、三つ上のお兄ちゃんと、一つ下の弟がね」

アネットは「仲いいのー?」とか「ご両親はー?」等とさり気無く朔耶の家族構成を聞き出そうとする。朔耶も、世界を隔てた家族の事を知られても別段困る事は無し、と色々と家族のエピソードを話した。

「へえー、お父様は工房主をやつてるのねえ。サクヤちゃんの道具作りって、そこから?」

「んー、どちらかと言うとあたしは弟の影響かなあ。あと武器集めが好きだつた幼馴染とか」

詳細はほかしつつ、元の世界の人間関係を語る朔耶。

そこからアネットが得た情報を纏めるならば、父親は機械技師であり工房主。母親はただ的一般民で、兄は闘士から芸術家に転身し、それでながら地元の傭兵团に所属して稼ぎを得ているといふ変わり種。弟は学者かつ発明家でもあり、近所の幼馴染は武具コレクターという好事家、となる。なかなかに濃い生活環境で育つた事が窺えた。

実際は、父親は町の鉄工所を経営する工場主。母は一般庶民で専業主婦。兄は格闘技オタから萌えオタに転身し、現在は地元の警備会社に勤務している。弟は機械弄り好きの理屈屋。幼馴染は防犯グッズや軍用品集めが趣味だった元ミリタリーオタだ。

兄弟と幼馴染の四人で遊ぶ事が多かつたため、濃い生活環境というのはおおむね間違つていない。

昼食を終えて土官食堂を後にした朔耶達は、帝都城の下層階に広がる城下街に繰り出した。

「わー、公園みたいな場所はちゃんと空が見えるんだねー」

「一般民の憩いの場だからねえ。植えてある木なんかは外から持つて来てるのよ?」

城内に点在する中庭のような公園には、真ん中辺りに石で囲われた小さな池が設置されており、綺麗に均された土の地面にはわずかだが草木も生えている。

壁際の木椅子に腰掛けた老人が日光浴を楽しみ、池の周りでは子供達が葉っぱで作つた舟を浮かべ、海戦ごっこをして遊んでいた。ふーっと息を吹きかけて走らせた葉舟で相手の葉舟に体当たりを仕掛け、沈めたら勝ちらしい。

「山頂の城内で海戦遊びとはこれ如何いか?」

どこの世界でも、子供達はそこらにある物を使つて色々な遊びを考え出すモノなんだなあと感心しつつ、朔耶は小さな池の中で練りあげられている海戦の様子を見物する。

「へーかの葉舟はおおきくてずるいよー!」

「どうか? 余の執務室にある植物の葉だが」

「ここにある木の葉っぱを使わないダメー!」

ズルツと、朔耶は足を滑らせて転びそうになつた。一般民っぽい服装をした銀髪の優男が、子供達に交じつて海戦遊びに興じている。

「あー、陛下はたまにああやつて下々の民と交流してるのでよ」
バルティアを指しながら困惑顔をする朔耶に、アネットは苦笑しながらそう説明した。若き皇

帝陛下は政務の合間にも時折りふらつといなくなる時があるが、大抵はお忍びで下街に来ているそう。

実は下層階の住人達との交流で得られる抜け道の情報は、彼が監視者の追跡を振り切るのに役立つてゐる。探検好きな子供達は、密偵隊員も把握していないような『堀の上に出来た抜け道』や、路地の途中の古くなつた『壁に出来た抜け穴』などを見つけ出す。子供達にしか通れないような場所もままあるが。

公園の葉っぱで作り直したバルティアの葉舟は、子供連合の集中攻撃で敢え無く沈没。自軍の舟を失つたバルティアは、仕方なく執務室に戻つて仕事の続々に勤しむ事にしたようだ。

子供達にお菓子を与えたバルティアは、中庭公園と城内の境目付近に立つアネットと朔耶の姿を見つけると、軽く目配せをして去つて行つた。

アネットは目立たない動きでそつと礼をとり、朔耶は「え？ なに？」と目をぱちくりさせる。

池の周りでは、子供達が先程使用不可を言い渡した『皇帝の葉舟』の所有権を巡る戦いを始めていた。
なかなか強かな帝都城の子供達であつた。

憩いの場を後にした朔耶達は城内市場にやつて來た。

ここで売られる工業製品の中には、城内の工房で作られた物の他に余所から仕入れた物もあり、食料もまた定期的に籠の街から城まで籠などを使って運び込まれてゐる。

山岳地帯の多い帝国領内では狩猟が盛んで、野菜などの農作物は隣国キトからの輸入に頼つてい

た。キトと隣接する平野部では作物を育てたりもしているが、それも微々たるものだ。

「この先は繁華街さね。そこから先は春売り通りだけど、見ていく？」

「んー、遠慮しとく」

ここから先は、ちよいと狭い通路——というか路地に入れば少々怪しい商売人がたむろしているという裏通り。表の店では取引できないような商品が扱われていたりする危険地帯だ。

何故お城の中にそんな場所があるのかと問えば、ここは城内といえど多くの一般大衆が暮らす街。一定数の『善良でない人々』の存在は、健全な社会を維持していく上でむしろ欠かせない、いわゆる必要悪として黙認されているとの事だつた。

怪しげな通りを見つめながらそんな話をしていた一人に、声をかけてくる者がいた。

「ん？ アネット隊員、それにサクヤ殿も、こんな所で何を？」

「あら隊長」

「ここにちは～」

通り脇の路地からふらりと現れたのは、ガルブレック密偵隊長だつた。

朔耶に街を案内していくと説明するアネットに、案内されてましたと繋げて茶目っ氣を演出する朔耶。

しかし竜籠の中での術封じの枷の破壊や、謁見の間での電撃攻撃を知る者としては、そんなお茶目な態度にも引き攣つた笑みしか返せない。例えば鋭い牙と爪を持つ巨大な魔獣が、子猫のようにじやれついてきても悪夢にしか思えないように。

「今なんか失礼な事を思われた気がするつ」

「あ、いや……自分は別に」

「ところで隊長はここに何か用事でも?」

「自然な流れで話を逸らしてフォローする密偵部隊の頼れる部下、アネットのワインクに軽く肩など鍊めつつ、ガルブレックはその問い合わせに答える。

「側近周りからの依頼でな、書簡の配達さ」

「え、隊長自らですか?」

「機密指定だったからな、それだけ重要な書簡なんだろうさ。詮索はするなよ?」

何気につきな臭い任務内容を話しているが、上層部の偉い人達がこの辺りにいるような下層の脛に傷を持つ者達に汚れ仕事をさせるのはよくある事なので、アネットも「ふーん」で流していた。朔耶も興味があるのか無いのか、はたまた分かっているのかいないのか、ガルブレック隊長の腰に装備されている帝国の紋章入りの黒いナイフを観察してたりする。

「それでは、俺は上に戻る。……あまり妙な所を案内するなよ?」

「あらあ、将来陛下の伴侶になるかも知れない御方なのに?」

この国の暗部についても多少は知つておいた方がいいんじゃないのお? と、冗談めかして言つたアネットに、ガルブレック隊長は複雑な表情だけ返して上層階へと戻つて行つた。

雪山の白い斜面と山頂に聳え立つ灰色の帝都城あかねいろが茜色あかねいろに染まる頃。

士官食堂で夕食を済ませて湯浴み場に行き、夜になれば寝るだけという、帝都城での生活サイクルを組み上げた朔耶は、アネットと別れると適当な隠し部屋を探して潜り込んだ。

与えられた上層階の部屋は、とある事情から使わない。

「さてと、今日の締めくくりにレティと交感でも繋ぎますかね」

友人に電話するような気楽さでフレグанс方面に意識の糸を伸ばす。交感の相手、レティレスティアを強く意識する事で彼女の持つ交感能力に触れるのだ。

——サクヤ? ——

『やほーレティ、あたしだよー』

相変わらず攫さらわれた立場にある事を感じさせない明るい調子で交感を繋いでできた朔耶に、レティレスティアも落ち着いた様子で応える。

——ああ、サクヤ、待つていましたわ。今日は何だか楽しそうですわね? ——

『うふふー、分かる? 今日はねえ、お城の中をあっちこっち見て回ったんだよ』

バルティア帝に見初められ、帝都城内での行動がかなり自由になつたという話は昨日の内に報告してある。レティレスティアは、どどど、どういうコトですか? と初めはかなりの動搖を見せたが、交感から伝わる朔耶の気持ちや思惑を感じ取り、今は落ち着いている。

『まあ当分そっちには帰れそうにないけどね』

——今後も帝国には正式に抗議を続け、サクヤの即時解放と返還を求めていきますわ——

朔耶の身の安全は図られているため、レティレスティアも幾分安心はしている。が、しかし、朔

耶が帝都城で割と楽しく過ごしている事を知ったが故に、彼女は帝国への憤りを嫉妬にも似た感情へと変え、決して和らげようとはしなかつた。

朔耶はそんなレティレスティアに微妙な気持ちを抱きつつ、彼女を宥めたり、王都の様子を尋ねたりして就寝までの時間を過ごすのだつた。

朔耶が帝都城生活に馴染んでいた頃。

王都フレグンスでは、フェルト卿の置き土産である書類、すなわち卿の派閥に与し帝国と繋がっていたと思われる貴族達の名簿の検証が進められるかたわら、城内で行われる『選定の儀』が大詰めを迎えていた。

約四年おきに開かれる、次期宮廷魔術士長を選出する戦いの儀式。行使する魔術が全て光弾に変換される特殊な精靈の腕輪を装着し、己が持つ魔力と魔術運用技術の全てを駆使して競い合う。この精靈の腕輪の面白いところは、行使されるその魔術がたとえ非戦闘用の術であっても光弾に変換されて飛んでいくという点にある。

放された光弾は相手が同規模の威力を持つ光弾を放てば相殺されてしまうので、魔術戦のセンスや経験はどうしても響いてくる。しかし非戦闘型の魔術士でも魔力の大きさと魔術運用技術の力量によって、戦闘型の魔術士に勝ててしまう場合があるのだ。

つまり純粹に魔術士として優れた者が勝ち残れる仕組みになつていて。

「——炎は猛り渦巻く大蛇となりて——」

「——風よ水よ集いて凍てつく刃となり——」

本来なら渦巻く炎が大蛇のように対象に絡みつく『炎蛇』^{えんじや}と、激突すれば対象に物理的な衝撃とともに冷気によるダメージも与える事が出来る『氷塊』^{ひょうかい}という攻撃魔術が、それぞれ光弾となつてぶつかり合う。

『炎蛇』の術者が放つた光弾の帶を『氷塊』の光弾が突き破り、『炎蛇』の術者に直撃した。『炎蛇』の術者は、自身の放つた術の真っ只中を『氷塊』の術者の光弾が突き抜けてきたためにその軌道が見えず、まともに食らってしまったのだ。この一撃で決着がついた。

「そこまで！ 勝者、レイス・チル・アクリエイア！」

会場にどよめきと拍手が鳴り響く。そこには「やはりアクリエイア家が勝つたか」という納得と感嘆の溜め息も混じっている。

「しかし、アクリエイ家の子息にもさすがに落ち着きが見えてきましたな」「余裕の表れかもしれませんな」

倒れた対戦相手に係の術士達が集まつて治癒術を施している中、レイスは壇上で観戦している国王カイゼルと、王妃アルサレナに一礼して戦いの場を後にする。

相手は今回の儀で最も手強い対戦となりそうだった魔術士系名家の嫡男。以前、朔耶が抜き打ちの魔力測定を行つた際、七十四石というレイスに次いで高い魔力値を記録していた男だ。その彼を下し、レイスの優勝はこれでほぼ確実となつた。

「お疲れ様でした、レイス様」

「ああ、どうにか勝てたよ」

控え室に戻つて来たレイスを、世話役のフレイが勞いの笑顔で出迎える。

「明日で最後ですね」

「そうだな。ようやくここまで來た」

だが家の再興はここからが本番である。レイスは選定の儀を勝利で飾り、宮廷魔術士長の座に就いて活動を始めるまでは気を緩めるつもりの無い事を無言のうちに伝える。フレイは若干身体を寂しそうにしながらも、納得したよう領きを返した。

それでも気持ちを確かめ合う事は忘れず、そつとキスを交わす二人。あまり余韻は残さぬようレイスは気持ちを切り替えるべくすぐに別の話題を振つた。

「今日は姫様からサクヤの事で何か情報を？」

「はい、変わらず元気にしているそうです」

自分が警護を外れたわずかな隙に朔耶を攫われたとして、責任を感じたフレイはしばらく臥せつてしまふ程に落ち込んでいた。

その事を気に掛けたレティレスティアが、交感で得たという朔耶の帝国での近況を彼女に教えてくれたのだ。帝国から交感を繋いできた事には、さすがにレティレスティアも驚いているようだつたが、そんな彼女から朔耶の無事と帝都でのマイペースっぷりを聞かされたフレイは、塞いでいた気持ちを何とか回復させた。

さらに落ち込んでいる自分を朔耶が心配していたと知り、「嘆いている場合ではない」と気持ち

を奮い立たせ、今こうして自分の役割を果たすべくレイスのサポートに動いているのだった。

落ち込んでいる暇があれば、朔耶救出のために何か行動しなければ、と。

「しかし、まさか皇帝の懷柔に動くとは思わなかつたが……」

「なんでも、サクヤ様を護る精霊の力が發揮されているとか」

今は選定の儀に集中している事もあつてあまり詳しいところまでは聞き及んでいないが、朔耶は帝国で皇帝とのコネ作りに奔走しているという。

帝国領に到着して早々に謁見の間で大立ち回りをやらかし、その騒ぎで皇帝に気に入られたといふ話なのだが、その凄まじいバイタリティと行動力には、レイスも脱帽であつた。

精霊によって異界の地へ単身召喚され、糺余曲折あつてようやく生活基盤が整つたと思つた矢先に今度は帝国の地へと攫われ、虜の身となつても諦める事無く生き延びるために行動する少女。レイスは、王都までの旅の途中で朔耶から聞いた言葉を思い出す。

『あたし、この世界の人間じやないんだ……道具作りは、とりあえず自分を表現できる事をやつてないどさ、押しつぶされちやいそうだだからなんだよね』

環境や立場、たたかひ世界が異なるとも、自分で在り続けようと足搔く朔耶に、レイスはおのれの境遇を重ね合わせた。

「一刻も早くフレグансの情勢を建て直し、帝国からサクヤを取り戻す。そのためにも……フレイ」

「はい、レイスさま。しつかりお手伝い致します」

フレグランスの若き宫廷魔術士長とその補佐になる予定の二人はもう一度抱擁を交わすと、明日、選定の儀の最終日に向けて英気を養うのだった。

翌早朝。帝都城下層階の一角にて。

「なんだ、ここで寝ていたのか」

バルティアが隠し部屋の一つを訪れると、朔耶がベッドの上でごろごろしていた。

「何よ、ここもあんたの寝室？」

「城の隠し部屋はほとんど余の寝室にしているな。まだ見つけていない部屋もあるだろ？が」「隠し部屋だらけなのね、この城って……なんか嫌な感じのする部屋もあつたけど」

朔耶は普通に歩きながら意識の糸を使って壁の向こうや天井、床下などを探る事が出来るので、隠し部屋らしき空間があればすぐに見つける事が出来る。

たまたまあまり近付きたくない空気を漂わせた部屋もあつたが、そういう部屋は隠し部屋というよりも、通常の部屋をわざわざ塗りこめて閉鎖したと思われる場所だった。

「余の状況を考えれば分かるとは思うが、色々表に出せないモノも多いのだ、この城は」

部屋ごと封印してしまうような陰惨な事件も珍しくなかつたと説明され、朔耶は若干眉をひそめる。

（まさか精霊が騒いでるのって、そういうのの自縛靈みたいなのがいっぱいいるとかのせいじやな

いでしょ？）

朔耶は王都フレグランスの街中で白昼堂々馬車ごと攫われ、この帝都城まで連れて来られたのだが、途中籠の中であつた一騒動のあたりから次第に自分の中の精霊がざわめき始め、さらにたくさん

の精霊が朔耶のもとに寄つて来ては力の使い方を教えていくという不思議な経験をした。

あまりに多くの精霊が集まつて来るため、レティレスティアに自分の無事を知らせるべく伸ばした意識の糸に精霊が引っ掛けかりまくつてしまい、交感を繋げられなくなる程だつた。今はそんな精霊の洪水もすっかり落ち着いているが、自分の中の精霊のざわめきは続いている。

「まあ、幽霊の類の噂も多いからな、精霊術を使うなら何か感じぬか？」

「うそ！ マジで？」

ぞぞぞっと肩を震わせる朔耶を見たバルティアは、ニヤリと笑みを浮かべるとおもむろに歩み寄り、さりげなく朔耶の肩に手を回す。

「精霊と通じる者が靈を恐れるのか？」

「だって全然別物でしょーが、精霊と幽霊つて」

朔耶はバルティアの手をペいつと払い落としてベッドから降りると、ジャケットを羽織つて隠し部屋の出口に向かつた。

「どこへ行く？」

「朝ご飯食べていくの」

「ならばちょうど良い、余の朝食に付き合おうがよい」

これから朝食だと言うバルティアの誘いに、朔耶は怪訝な顔を向いた。それなら一体何をしにこの隠し部屋にやつて来たのかと。

「寝座ねぐらの巡回だ」

「あ、そ」

自分と隠し部屋における縄張り争いをしているかのようバルティアを見て、ますます皇帝のイメージが崩れていく朔耶だった。

朔耶も彼同様与えられた部屋は使わず、城に点在する隠し部屋を寝床にしている。広すぎて落ち着かないという事もあるが、昨日部屋を見た時に意識の糸で探つてみたところ、部屋の周りに幾つもの空間を感じしたからだ。

そしてそこには監視する者の気配があつた。

壁の向こうや天井裏、床下などの隠し通路に合計四人ほど。

しかも彼女が精霊術の使い手であることを考慮に入れ、交感による索敵対策として、比較的探りやすい場所に一人配置してそちらに気を向けさせ、本命の監視者を意識の糸を向けにくい場所に潜ませていた。

高層の階から足元への索敵は階下にいる人間をも認識してしまっため、あまり行わない。家具や机の床下なども、普通はそんな出入りの困難な場所に潜むとは考えないので、見落とされがちだ。しかし、交感の制約が無い朔耶の索敵は全方位に意識の糸が伸ばせる。したがつてそういう心理的、技術的な死角を突いても全く意味がないのだ。その事を知る人間は、帝国にはいない。

バルティアに連れられて帝都城のほぼ最上階、皇帝の部屋がある階までやつて來た朔耶は、意外に落ち着いた雰囲気の内装や、壁に飾られている肖像画などを観察し始めた。この階は全て皇帝のための施設になつていて、寝室をはじめ湯浴み場、遊戯室、修練の間など色々な設備が揃つている。

幾つか厳重に鍵の掛けられた部屋があつたので何の部屋かと朔耶が尋ねると、バルティアは先代や先々代皇帝達による負の遺産だと説明した。

「余は拷問や薬女やくじよ遊びに享樂は感じぬのでな。いらん部屋は全て閉じてゐる」「あー……」

何やら怪しい響きを持つ言葉が並んだので、朔耶はそれ以上深く聞くのを止めた。

やがて皇帝の食堂に到着すると、だだつ広いダイニングを予想していた朔耶は比較的ござんまりした部屋を見て拍子抜けした。それでも個人が食事をとるためだけの部屋としては十分に広いのだが。

バルティアの後に付いて入つて來た朔耶を見て、給仕達は一様に目を丸くしたが、バルティアから直々に后として指名を受けている話は既に聞き及んでいたのですぐに納得した。

「む……今なんか間違つた納得をされた気がする」

「気にするな」

くくつと笑いながら朔耶に席を勧めたバルティアは、給仕に朔耶の分も用意するよう申し付けて

席に着く。

テーブル上の籠に盛られている果実に早速手を伸ばしている朔耶を楽しそうに眺めながら、バルティアは「サクヤちゃんは食べ物で釣るのが一番効果的かと……」とアドバイスをくれた密偵部隊の女性隊員に感謝した。

(サクヤは本当に、良いな……次はキトから美味しい菓子でも取り寄せるか)

食事を待つ席で、朝から朔耶のハートゲット作戦に余念がない暇人な皇帝陛下だった。

ガラガラと食事を載せた台車を押して来た若い給仕の娘が手際よくお皿を並べ、手慣れた様子でスープを注ぐ。壁際に並んでいる二人の給仕達はお皿を下げる役で、料理を運んできて卓上に並べるのはこの若い給仕の役だった。

「これ、後から後から出てきたりしない?」

「朝食だからな、せいぜい五皿程度だ」

何皿まで食うべきかと悩む朔耶に苦笑しながら、バルティアはスープを一口含む。

「……！」

強烈な違和感。

咄嗟に、同じようにスープを口に運ぼうとしていた朔耶にスプーンを投げて彼女の手を止める。飛んできたスプーンを左手でしっかりと受け止めながらびっくり顔を向けてくる朔耶の素晴らしい反射神経に感嘆しながら、バルティアは身体中の力が抜けていくのを感じた。



「バル!？」

かなり即効性のモノらしく、それら一連の動作だけで視界がボヤけて身体のバランスが取れなくなり、椅子から崩れ落ちる。今までのようすに身体が痺れる程度の毒では無い。

暗闇に閉ざされていく世界で最後に見た光景は、血相を変えながら椅子から立ち上がる朔耶の姿。バルティアは何だかそれだけで満足な気分だった。

（毒で来るのは久しぶりだな、しかも完全に殺す気らしい。やはりサクヤ絡みか……？）

これまでにはせいぜい頭痛や嘔吐おうとをもよおすくらいで、命の危機に瀕するほどの強い毒が使われた事はなかった。いつでも消せるという意図の込められた暗殺『ごっこ』。

だが、朔耶を妻にするという宣言は、影の支配者達にとつて随分都合が悪かつたらしい。

考えられるのはフレンダンスの王女を後に推していた一派だが、ここまでするということはやはりあの国の王族の血に何かあるのかもしれない等と、薄れゆく意識の中でバルティアは割と冷静に思考を巡らせていた。

「これで終わりかと思うと、意外に落ち着いていられるものだな……」

「馬鹿言つてんじゃないわよ！」

朔耶の怒鳴る声に、バルティアの遠退いていた意識は急速に引き戻され、鮮明になつていく。戻つた視界の先では、朔耶の手が己の胸に当たられて仄かに発光している。

体内から毒が浄化されていく感覚は、清流に身をゆだねているような心地よいものだつた。

「……まさかこれ程の毒を浄化できるとはな。命拾いしたようだ」

「あたしもビックリだよ……」

バルティアが倒れたのを見てすぐに毒が盛られたと氣付いた朔耶は、毒も枷や鍵と同様、『物にお願いして言う事を聞いてもらう』という精霊術で何とかならないかと彼の身体に意識の糸を送り込み、体内を蝕む毒に分解を呼びかけた。次いで周りにいた精霊達に治癒を頼んで回復させたのだ。毒の中和ではなく分解、体内的解毒ではなく浄化という、熟練した精霊術士でも二人がかりで行うような極めて高度な治癒術を朔耶は一人でやつて見せた。

毒を抜かれて回復しただけでなく、身体の調子まで前よりよくなつたバルティアが自然な動作で立ち上がる。

朔耶の高度な治癒を見て出入り口付近で呆けていた衛兵は、我に返つてさつと表情を引き締める」と、サーベルを抜いて給仕の娘に歩み寄つた。顔を青ざめさせて後ずさる給仕の娘。

「ちよつと……つ、何する気よ！」

「皇帝の暗殺を企てた者はその場で処刑される決まりだ」

只事ではない雰囲気に声を上げる朔耶に、バルティアは簡潔に説明した。

皇帝に出す食事は専用の厨房で作られ、あらかじめ毒見を済ませたモノが台車で運ばれる。

厨房から食堂までは専用の廊下が使われ、この廊下には隠し通路等の仕掛けは一切無い。つまり毒を入れるならこの廊下の移動中しかなく、そこを通るのは台車を押す給仕一人に限られる。

これは毒殺対策の一環であり、毒を盛つた者が即刻明らかになるような段取りと人員配置をする事で暗殺をやりにくくしているのだ。死なば諸共もうどともといった捨て身の覚悟がなければ毒を使う事は出

来ない。

「厨房で盛られてたつて事は？」

「毒見は厨房の全員で同時に行なわれるからそれは無いな。全員がゲルなら別だが……」

「ん……確かにそれはーつてちょっと待つて待つて!!」

朔耶は衛兵がサーベルを構えて給仕の胸を貫こうとするのを止めた。そして壁際でぎゅっと目を開じて震えている給仕に近寄ると、「ちよいと失礼」と両手で頬を包み込んでオデコを合わせる。

バルティアは戸惑う衛兵に待てと合図して朔耶の行動を窺つた。食堂内にいる他の給仕一人も、同僚が仕出かした暗殺未遂に信じられないといった面持ちで成り行きを見守る。

恐怖と不安に包まれている給仕の心に意識の糸を絡ませ、表層意識から情報を読み取っていく。

「……リーファ・クルネス、十七歳、給仕歴五年、肉親は妹が一人だけ……」

ビクリと給仕の肩が跳ねた。青ざめていた表情がますます青白くなっていく。

「……シーファ・クルネス、十四歳、一般兵食堂の手伝い、行方不明、脅迫状、毒薬、血の付いたリボン、妹の衣服……」

「あ……ああ……」

給仕はガクガクと膝を震わせ、呻くような声を漏らす。そしてその見開かれた目からは涙が零れ始めた。

バルティアをはじめ、他の給仕一人や騒ぎを聞いて駆けつけた応援の衛兵達が固唾かたずを呑んで見守る中、リーファという給仕の身に起きた災厄が朔耶の口から紡がれていく。

「……ふう、ちょっと待つてね」

朔耶は一旦リーファから意識の糸を解いてオデコを離すと、食堂の隅にある戸棚を指さしながら言つた。

「そこ！ どつちの味方？ バルの味方なら出てきなさい」

「『バル』というのは余の事か？」

「そ、いつまでも『あんた』じゃ具合悪いしね」

そんな軽い掛け合いをしながらも戸棚からは目を離さない。皆が注目する戸棚にはしばしの経過後も何ら変化は無く、朔耶はすーっと目を細めると——

「あつそ」

そう言つて伸ばした意識の糸の先に電撃を発現させた。カカアアンという乾いた音が響き、戸棚のあたりの床下から閃光が漏れる。

顔を見合わせる衛兵達に、調べてみよと指示を出すバルティア。

「おお？ こんな所に穴が」

「陛下！」 曲くわ者が潜んでおりました！」

戸棚を動かすとそこだけ不自然に色の違った床板が張られており、その下に隠されていた穴の中には氣絶した男がうずくまつっていた。

バルティアは隠し穴から引きずり出される男を見ながら、笑い出しそうになるのを堪えていた。強力な治癒術で暗殺を食い止め、その裏に潜む陰謀を見抜き、こんなにもあつさり監視者をいぶ

り出してしまった朔耶の力には、畏怖や感嘆よりも痛快さを覚える。

今すぐにでも抱き締めて自分のモノにしたくなるが、唇の一つも奪えず返り討ちにされるのが関の山だろう。

すぐ目の前にいるのに決して手に入れられないであろう存在。もの欲しそうな表情を浮かべるバルティアの視線の先では、朔耶が再び給仕の娘にオデコを合わせていた。

「気持ちを落ち着けて、妹さん……シーファの事を強く想つて」

朔耶はこの広大な城全域にまで意識の糸を広げると、リーファの中にあるイメージを頼りにシーファの搜索を行つた。さすがにこれだけの規模で交感索敵を行うと精神的にもキツく、自然と呼吸が乱れてくる。

そしてそれ程の規模の交感をすると、表層意識だけとはいえ触れているリーファにもまた、精神的な負荷が掛かるらしく、彼女は朔耶にしがみつき身体が崩れ落ちそうになるのをじつと堪えていた。

傍からは、うら若き乙女二人が呼吸も荒く上気した顔をくつづけて抱き合つてているようにも見えるので、同僚の給仕一人は頬を染めながらも興味津々な様子で見つめ、衛兵達は同じく赤い顔で视线を泳がせている。

そして皇帝陛下は「良いな……」などと呟きながら、じっくり乙女一人を眺めていた。

城の防壁部分の地下にある牢の、さらに下層。

そこは土牢^{つちろう}と呼ばれる特別な牢獄で、通常の牢が鉄格子付きとはいえ、窓のついた比較的まともな石造りの小部屋なのに對して、こちらは段状になつた剥き出しの地面に横穴を掘り、そこに手足を縛つた囚人を放り込んで入り口を土で塗り固め、半分生き埋め状態にする拷問牢である。

特に死刑すら生温いとされる大罪人や、疫病にかかつた囚人を隔離するために使われるが、政治闘争の果てに閉じ込められる権力者も多くいたという。

「三段目の奥から二つ目、ちょっと灯り出すから掘り出すモノ持つてきて」

索敵でシーファが閉じ込められている場所を探り当たした朔耶は、衛兵達から詳しい位置を聞き出すと、衛兵を向かわせると言うバルティアに、自分も行くと告げて食堂を後にした。

「ならば余も付き合おう」と付いてくる皇帝陛下。

緊張する衛兵達を余所に、朔耶は途中、成り行きで付いて来た同僚の給仕二人を厨房や医者の所に向かわせて、お湯と清潔なシーツなどを上層階の別室に準備させると、リーファをそこで待機させた。

シーファを見つけたらすぐに会わせてやりたかったが、場所が場所なだけに酷い状態にあるかもしれないと考慮しての事だ。

一寸先も見えない闇に包まれた土牢の間が、朔耶の要請に応えた精靈の放つ光玉によって照らし出される。見れば何度も掘り返された跡の残る段状の地面が、陰鬱とした空間のずっと奥まで続いていた。

バルティアもここに降りるのは初めてで、また牢の番をしている者もこれ程はつきり照らし出さ

れた土牢は見た事がなかつたらしい。その場に漂う寒々しい空氣に氣後れしている様子だつた。

長く務める牢番によれば、もう随分長い間この扉は開かれてはいないが、上の通常房も含め牢の密閉性についてはかなり疑わしいとの事。實際、いつの間にか囚人が増えたり減つてしたりする的是よくある事らしい。確かにやたら隠し部屋や隠し通路の多いこの城のこと、秘密の入り口が一つや二つあつてもおかしくはない。

朔耶自ら先頭に立ち、意識の糸を伸ばして、土そのものに掘りやすくなつてくれるようお願ひしながらスコップを振るう。わずかな空気穴だけが穿たれた土の壁が掘り崩されていく。

やがて異臭と共に狭い横穴が現れ、中から手足を縛られ、目隠しと猿轡さるぐわをされた少女を発見した。彼女はほぼ全裸で、身体には彼方此方に痣あちこちと膿あざんだ傷があり、脱水症状と極度の疲労で衰弱していた。

「水を！」

朔耶は彼女の姿に配慮して灯りを少し落としてから、拘束を解いて持参したシーツに包む。そして水筒から少量ずつ水を口に落としてやると、朦朧もうろうとしていた少女の意識が少し回復したらしく、自ら水を求め始めた。

朔耶は彼女が咳せき込まないよう、ゆっくりと水筒を傾けながら問う。

「あなたは、シーフア？」

「ん……こふつ、ゆるして、ください……ゆるしてください……」

「シーフア？ もう大丈夫だから、大丈夫だからね？」

「ゆるして……おねえちゃん……たすけて……もういや……ひぐ……」

「大丈夫、大丈夫よ」と宥めながら、朔耶は衛兵に向かつてリーファの待つ部屋のカーテンを閉じて薄暗くしておくよう指示を出すと、すかさずバルティアがそれに従うよう衛兵に合図をする。

朔耶には衛兵を動かす権利までは与えられていないので、バルティアが付いて来たのは正解だったと言える。

「外傷は大体治せたと思うけど、体力の消耗とか、後は内面ね……」

シーフアを運ぶ間、朔耶は精靈の治癒の力を使つて彼女の傷を癒していた。だが、精靈の治癒の力も心に負つた傷にまでは及ばない。終始震えていたシーフアは姉リーフアの姿を確認すると、ようやく安心したのか気を失うように眠りについた。

リーフアは妹を助けてくれた朔耶に涙ながらに感謝しつつ、皇帝に毒を盛った事を詫びた。

「処刑するなんて言わないでしようね？」

「余は不問でも構わんが、側近共は何と言うかな」

「黙らせなさいよ。あんた皇帝でしようが」「お飾りのな」

リーフアからある程度事情を聞き終え、後日シーフアが回復したら彼女からも話を聞く事にした

朔耶達は、姉妹のために護衛を残して一旦引き上げる事にした。

「あんたを狙う連中にについて探るいい機会だからって言えば、無下に出来ないっしょ」

「ふむ、その線で通すか」

それでも彼女を罰せよと訴える者がいるなら、その者こそが怪しいという事になる。

もし側近の中に、バルティアの命を握つておこうとする勢力に与する者がいたとしても、わざわざ疑われるような真似をする愚か者だとは思えない。

「ところで食堂で捕らえた者だが、給仕に使つた術で奴から情報は引き出せんのか？」

「うーん、相手がしつかり隠そそうとしている人だと難しいっぽい」

確かに、諜報をやつている人間がそう簡単に自分の雇い主を明かすようなへマはしないだろうな」と肩を竦めるバルティア。

「では薬で催眠状態にして探るというのはどうだ？」

「そんな非人道的なやり方には協力できません」

ふいっと顔を背ける朔耶にふと違和感を感じたバルティアは、おもむろに朔耶の手を取る。

「……震えているのか？」

「……」

小刻みに震える自分の手を見た朔耶は、一瞬ばつの悪そうな顔をして俯いたが、すぐに手を振りほどくと、普段よりも若干低い声で言つた。

「当然でしょ！ あんな酷い事……」

「——！ サクヤツ」

突然、朔耶の身体がぐらりと傾く。咄嗟に支えたバルティアはどこか具合でも悪くしたかとその顔を覗き込んだ。顔色が悪いのは身

体的な疲労のせいか、精神的なモノのせいか、よもや土牢で何か悪い病気でも拾つたかと考えを巡らせる。

「ごめん……さすがにちょっと疲れたみたい」

「……少し休め。この近くにも良い隠し部屋がある」

人気の少ない狭い廊下を曲がり、少し進んだ先にある部屋に入ると、執務用の机を傾けて背後の壁の隠し扉を開く。

「あなたの寝座？」

「バルだ」

「ん？」

「余の愛称なのであるう？」

ニヤリと笑みを浮かべるバルティア。

きよとんと目を丸くした朔耶は、次いで小さく噴き出した。

「あんたなんか『あんた』で十分よ」

などと意地悪を言いながら隠し部屋に入った朔耶は、閉じ際に声をかけた。

「ありがとね、バル」

「……ふつ」

一人ニヤニヤ笑いをしながら食堂まで戻つて来たバルティアは、少しばかり室内が騒然としている

立ち読みサンプルはここまで